第三節　古代の宗教

1　仏教

原始時代の昔から、人々は天災をさけるために、種族保存のために、その身の安全のためにその他さまざまな願いをこめて、何ものかに祈ったことであろう。それは形として残らないものもあろうし、形として残ったものは石であり、山であり、木であり、又祠である。さらには神社であり神像であり、仏教伝来によるさまざまな仏像であり寺院であろう。古代の古墳時代から奈良、平安時代に於ける社寺として当地に伝わっているものは非常に少ない。

古代の仏教が国家を護り現世の利益を祈るものであって、地方でも金光明経、仁王経、法華経などが誦され、薬師、観音などの仏像を中心に息災延命を祈願し、法会・祈禱によって加護を念じたのである。東北地方の場合は蝦夷経営と結んで、怨敵降伏、夷民教化、辺要安穏というような目標をもつものとされた。東北地方に、いつ頃どのようにして仏教が伝わったかは明らかでないが、奈良時代になって、主要な城柵に寺院の伴うことが多く多賀城と多賀城廃寺、秋田城と四天王寺などの例がある。六八九年に陸奥国優嗜曇郡（置賜郡）の城養の蝦夷、肪利古男麻呂と鉄折という二人の者が僧侶になったことを政府が認め、これに仏像・仏具などを下賜したことがあり（「日本書記」）、城柵が蝦夷の教化に重要な拠点としての役割をはたしていたものとされている。七世紀終りには、出羽の蝦夷も同様に入信して政府から仏像・仏具を受けている。

天台宗は慈覚大師円仁のときに、東北に広まっているようであり、その開基とされている寺も少なくない（立石寺―山形市、瑞岩寺―宮城県、中尊寺・毛越寺―岩手県、蚶満寺―秋田県）。このころ寺に安置された仏像は、如来像では釈迦・薬師、菩薩像ではその脇侍として普賢・観音・日光・月光などが主である。また五大明王・

毘沙門天などはとくに北方鎮護の神として尊信された。

平安初期の東北に「徳一」という有名な僧がいる。恵日寺・勝常寺（いずれも福島県）及び諸仏像が、徳一のゆかりのあるものとして伝えられている。

円福寺観音像

白鷹町大字高玉に真言宗円福寺があり、その境内に観音堂が建っている。伝承によればこの観音堂は、もと同地内山麓の小字観音堂にあったものとされている。いつ円福境内に移されたのかは不明である。小字観音堂の近くには、県指定天然記念物の桜樹のある薬師堂が建っている。この観音菩薩立像は白鷹町指定文化財になっており、鋳銅像、像高二九・三センチメートルで像と台座は別鋳である。県文化財委員佐藤東一氏の所見によれば本像は置賜七番の札所観音堂の本像として奉安されてきたもので、寺伝では坂上田村麻呂の念持仏とされている。衣文線、後頭部櫛目、胸飾、天衣三段等裾に飛鳥ないし奈良前期の特徴といわれる曲折文を見せる。

第１３図：円福寺観音菩薩立像

又、同じく県文化財委員武田好吉氏は、『山形県の仏像』の中で次のように述べている。

「飛鳥・奈良時代として、わが山形県でこの時代の古い様式をもつ仏像は今のところ次の四ヶ所に安置されており、それはいずれも由緒ある古い寺である。

金銅釈迦如来立像　東田川郡朝日村大網、大日坊

銅造菩薩形立像　山形市大字山寺、立石寺

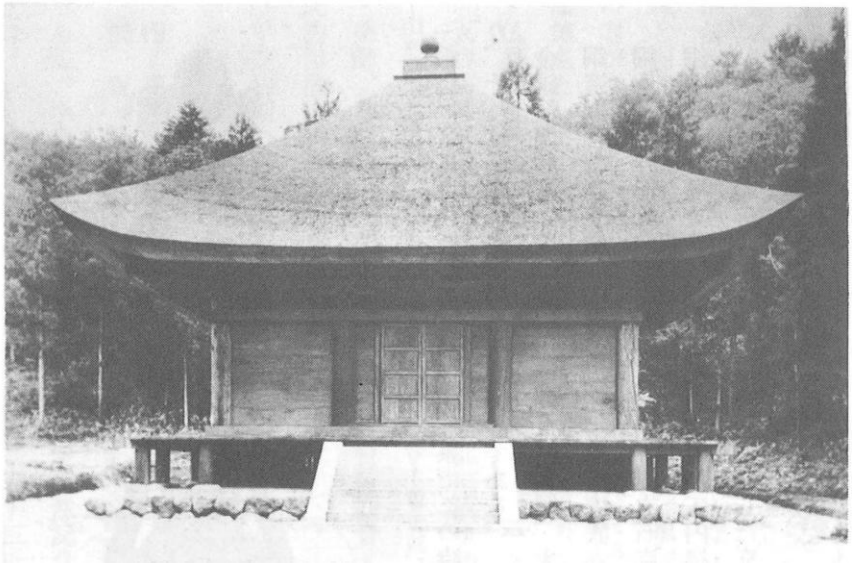
銅造観音菩薩立像　西置賜郡白鷹町高玉円福寺

しかし、その寺々には、その像を将来した資料や来歴もわからずいつの時代の作とはっきり断定で

きない。」

この観音像は手に損傷がある。時代は下るが、「天保十一年（一八四〇）四月二十七日、某所より出火、円福寺境内の観音堂残らず類焼の事」という記事が、鮎貝「小島氏日記」に見える。

平泉文化の面影をとどめるものの一つ白鷹町の北部、最上川と実淵川の合流点から、実淵川を上流に向って約四キロメートル、その左岸、深山部落の奥まった少し小高い山の中程に、深山観音堂が建っている。国指定重要文化財で（昭和二十八年指定）桁行三間、梁間三間、一重、茅葺、屋根は宝形造、平安時代に全国的に建てられた阿弥陀堂形式である。東北地方では、平泉の金色堂や、宮城県の高蔵寺と同じ系統のものであり、この堂も元来は阿弥陀堂として建てられたもので、本尊として現在の千手観音（焼損している）を安置してから観音堂といわれるようになったと考えられる。建物の大きさに比して太い円柱、高さの低い横架材、柱上舟肘木の曲線等は、阿弥陀堂建築の盛んであった平安時代の基本をよく伝えている。このため、従来建立年代も平安時代といわれてきたが、解体調査の結果、中世以



第１４図：深山観音堂

降室町時代と推定された。その主なる点をあげると、

(1) 平安風な諸点

四天柱の位置が側柱の柱筋と一致していて四本とも完備しており、周囲一間通りを化粧屋根裏としている。

・柱の径が約一尺三～四寸（大凡四十センチメートル）もあり、建物の規模に比して極めて太い。

・丸桁及び舟肘木の断面が矩形でしかも巾よりせいの方が低く、丸桁の上端には棰当りのための「小返り勾配」をとっていない。

・舟肘木は、内部の虹梁を除けば唯一の曲線材であって、平安時代の型を見せている。

(2) 中世以降の建立としなければならない点

・四天柱を梁行（前後）方向につなぐ二本の虹梁には絵様があり、また側柱（外廻りの柱）には飛貫および足固貫をさし通してある。四天柱の虹梁には側面に曲線型の袖切と渦巻きが刻まれ、下端には錫杖彫があって完全に唐様（禅宗様）である。又、軸部を飛貫や足固貫緊結する構法は唐様等新様式の影響によって中世以降（鎌倉中期以降）盛用されるようになったものである。

・円柱の床下部分が八角造りになっている。上代建築の円柱は、床下部分も床上と同様に円柱に仕上げている。

・背面および両側面の各中央間には、間柱を建てて壁板を納めている。間柱は巾六寸厚さ三寸の貫様断面のもので、飛貫や足固貫と似ている。この間柱が、後補されたとは考えらない。

・背面堂内部分に残る当初の隅木の造りは、配付棰の仕口が中世以降風の下半枘（ほぞ）で裏板の板溝も彫ってある。

・東北地方の場合、同時代の様式でも、中央との間に差を生じ、予想外に古い形式を守っていることがあること、又気候風土の関係で木割が太い。したがって虹梁や飛貫、足固貫が当初材であれば問題なく中世以

降としなければならないが、後世に補入されたとすれば平安の建築としてもよい。側通りの丸桁と四天柱上の棰掛の上端の棰どめ釘穴の調査によって、建立以来文化年間まで解体された跡がないことがわかり、飛貫、足固貫、虹梁などは当初材と見られるので、「中世以降の建立」と確定した。

以上のことによって、古様式（平安風）は残っているが、絵様の様式から室町時代の建立と推定された（『重要文化財観音寺観音堂修理工事報告書』）。

観音堂の中に安置されている千手観音像は焼損によって膝下を失っているが、一木形式の丈余の巨像で平安時代の造作である（前掲書）。これについては、『山形県の仏像』（武田好吉）でも平安時代のものとしている。

観音堂の建立者かということについては、断定できる史料はない。

第１５図：杉沢観音堂

杉沢観音堂

本尊は正観音で焼損している。これについて『東根村郷土史』によると、伝承であるが行基の作とし、堂は大同年中飛弾匠の造作としている。また、『山形県の仏像』（武田好吉）では、この仏像を平安時代後期の造顕と見ている。現在の堂は、明治三十九年焼失後再建されたものである。

２　古四王神社

越王・腰王・腰尾・古志王・巨四王・小四王・皇子王・高志王などと様々に書くが、いずれも同じ神を祀るものといわれている。主神ならびに由来については諸説があり、越族の王を祀るとするもの、越国の伸張を由来とするもの、秋田市古四王神社のように、阿倍氏の祖大毘古命（おおひこのみこと）が武甕槌命（たけみかづちのみこと）を祀ったことに始まるとするものなどがあるが、いずれにしても東北地方の人が蝦夷と称され、中

央権力が浸透し始めた頃、或いはそれ以前に由来するものが多いようである。

現在まで確認されたことは新潟、山形、福島、宮城、秋田の各県に建てられていて、東北地方特有の神社である。山　形県では、海岸線を北進した形のものと内陸に入ったものとが見られる。古四王神社の特徴は、いずれも北面して建っていることである。当町には他地区と比べてその数が多く、四カ所知られている。大字高玉権現堂にあるのは、越王と書かれておりかつては盗人神と呼ばれ、木造で東面している（元は木造であったという）。荒砥深山丘の南方畑の中に（旧道の傍）あるのは、腰神社と書かれた棟札があり木造で東面している。十王にあるものは石堂で元の位置から移されて建ち、古くは「こしょう」の地名のところに在ったという。もう一カ所、大字横田尻中町西に、寛政十二年の水帳によると「こしょう原」の名があり、これも古四王神社にかかわりがあると思われる。

第１６図：古四王神社位置

町内の社寺で創建年代のわからないまま、その創建を平安時代までに語っているものが多くある。

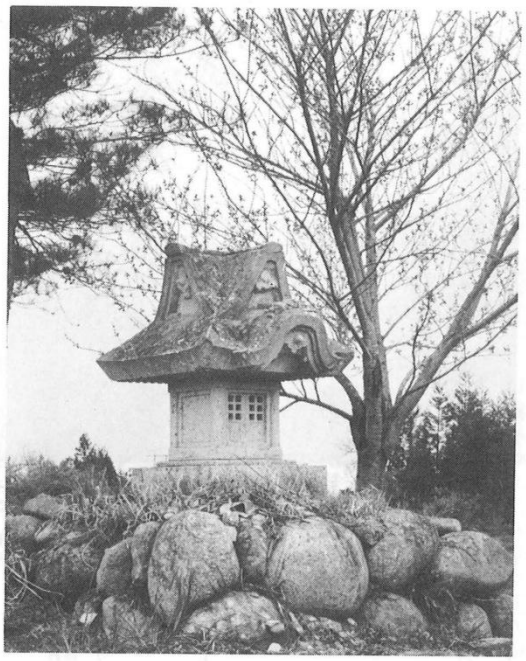
八乙女八幡神社（伝承、『荒砥町誌』）

鮎貝八幡神社（鮎貝八幡宮縁起）

滝本稲荷神社（口伝、『荒砥町誌』）

菖蒲薬師堂（伝承）

山口羽黒神社（羽黒神社縁起書）



第１７図：高岡小四王神社

蘊　安　堂（伝承）
白鷹山虚空蔵尊（縁起、「米沢事跡考」）
称　名　寺（寺伝、「米沢事跡考」）
長　福　寺（元禄六年堂宮書上帳）
横越大日堂（元禄六年堂宮書上帳）
向　福　寺（寺伝、廃寺）
金　蔵　院（寺伝）

古代における神社、寺、仏像は、中央権力の拡大（東北地方への北進）に伴って由来することに気づく。神の名のつく古四王神社、仏像では飯豊町中村観音・円福寺観音・深山観音・杉沢観音、八幡太郎義家に関する伝説、坂上田村麻呂についての伝説、或いは藤原蘊安に関するもの等すべてがそうなのである。こうした事象については、さまざまな見方があるであろう。ただ中村、高玉、深山はいずれも最上川左岸の山麓道沿いであること、杉沢は宮内・伊佐沢方面から高畠方面に通ずる最上川右岸の旧本道であったことなどは、何かしら古代仏教の布教（政権拡大）との関わりが感じられる。